

編集後記

木簡学会が発足してからすでに一年半余を経過した。『木簡研究』第二号も何とか予定どおりに第二回大会までに完成させることが出来そうであり、また大会準備も順調に進んでおり、本会の運営も軌道に乗って来た。

この第二号も創刊号と同じく第一部として前年出土の木簡についての最新情報を収録した。一九七九年出土木簡の中には、すでに昨年の第一回大会で報告された藤原宮跡東面北門外溝、平安京左京内膳町跡、滋賀県鴨遺跡、山形県道伝遺跡をはじめとして、全国各地よりの新出土木簡が含まれている。平安京内膳町跡の木簡は近世の糸割符との関連が考えられるものであり、また他の遺跡からも室町時代頃と推定される木簡が出土しており、古代史のみならず中世史・近世史についても、将来史料上での木簡の持つ役割の増大が予想されよう。木簡新出の情報をいち早く捕え、極力遺漏のないように報告しておくことはこの『木簡研究』の最も重要な仕事の一つである。幸にして本号においても、創刊号の時と同じく各地の調査機関・調査関係者の御協力を得て、多くの報告を寄せていただくことができた。それらの方々に心から御礼申し上げるとともに、今後も一層の御理解・御協力をお願いする次第である。

また一九七七年以前に出土した木簡についても、前号に引き続きいて逐次その概要を紹介して行く予定である。すでに木簡関係の文献

目録は幾つか発表されているが、個々の本については実見し難い場合も少なくないであろう。そのため本号では前号に引き続いて一九六五年頃以前のものについてその概要を掲げた。

論考篇においては岸・永田・榮原三氏より論文をいただいた。そのうち岸・榮原両氏の論文は第一回大会の報告をもとにしたものである。榮原氏の論文は柚井遺跡の木簡について現地を踏査し、発見の状況等をさらに深く追求され、現物は失われているとはいえ未報告の別の木簡の写真を新に発見され、また関連遺物等の調査確認もされており、まさに足で歩いて書かれた労作である。弘田柵出土木簡についても、以前に出土当時の記録の調査・紹介がなされたが、往年に出土した木簡については今後もこのような努力が必要であろう。本年六月、大阪市立博物館において「日韓文化交流展」が開かれ、慶州の雁鴨池から出土した木簡のうち四点が出陳された。大阪でのみ開かれた展覧会のため、関西在住以外の人々には目に触れ難いのではないかと思われることが残念であった。居延漢簡その他もごく少数ながら日本国内にあって原物を目にする機会が出来て来たが、今後もうこうした機会が増えて来ることが願われる。

最後に多忙の中を本号に寄稿していただいた方々、写真・図面の提供・発表を快諾された諸機関や関係者の方々に改めて心から御礼を申し上げるとともに、今後一層の御援助・御協力をお願いする次第である。

(田中 稔)